最も遠い村まで

　まず子供たちが虫に小便ひっかけられたと思って空を仰いだ。小さな粒が一つ一つゆっくり乾いた地面に吸い込まれた。一年ぶりのことで人々は多少なりとも戸惑いを覚えたかもう喜びの声を上げることさえ忘れていた。粒はだんだんと大きくなった。地面を叩きつける音が隣家への伝達手段を奪った。一年ぶりの雨が一日で降り尽くされそうな勢いで煉瓦づくりの家の低い天井を打ち、早々喜ばなくてよかったと人と人は不安な日を丸くなり抱き合ったのも束の間のことで、多くは洪水にのまれそのまま流されていった。

ウマノイド

　今日もウメの言葉に注意深く耳を傾けたつもりが何一つうまくいかなかった。ウメは手を差し伸べて「ただ一つ花があれば、いちばん近いバスに喜ばれたものを、言わんことはない」と眉をつり上げた。私の返答を待たずウメは右手を引っ張って大股で歩いた。例の建物に連れて行かれることは察しがついていたから私はおとなしく従った。空は晴れていた。雲がなく、風もなくて甲高い鳥の声がどこからか聞こえていた。熱気がこみ上げてくる。いくらかのウメやウマとすれ違った。ウメはそのたびに「ウメ」とか「ウマ」と言った。私もウメにならって「ウメ」とか「ウマ」と言おうと思って、ウ、ウと言ってちゃんと声が出るか確かめるつもりでやっているとウメがこちらを振り返って睨みつける。ウメやウマたちもそうしているうちに通り過ぎてしまう。「ウメもウマも縮こまってあんな感傷にひたってるの」語尾の曖昧な調子で言い捨ててまた前を見てひたすら歩き出すのだった。

day dream

　どういうわけか生暖かい空気しか出ない冷房設備に頼って窓を閉め切っていたせいで寝汗をかいてしまった前日の反省から窓を細くあけていたからか、受信料の請求が来た。

　受信する機械がないというと首を大きく縦に振って聞き分けよく去っていった。布団が湿っていた。暑くて作業を進める気になれなかった。風はあるらしいが、カーテンを揺らすだけで部屋の中を吹き抜けることがなかった。

小説家と呼ばれる男

　小説家と呼ばれる男がいる。私たちは二十四時間彼を監視している。私の名誉は同期のうちで最も早く国立衛生保全事務局に入局できたことだが、その名誉は男の監視役という職務がすっかり返上してしまったといっていい。

　私たちはまったく彼に敬意など払っていないことをあらかじめ断言しておく。妙な誤解は避けたい。長年業務に携わってきた上官の記憶によると、監視役が彼に取り込まれたという事実はかつて一度もない。それほど彼は変哲のないただの男だということだ。それなのに彼にこれほどまでに厳重な警戒体制でのぞむのはなぜかとこれは必ず新米の監視役が上官に一度は尋ねることであるが、彼は魅力がないからこそ監視するに足るというのが当局の見方である。それならばなぜ彼でなければならないのか。即座に私たちはこう反問する。「なぜ私たちが仰々しくも警戒の網を張らなければならないのか。私たちは警察ではない」

よしおの中学生日記

　よしおは自分の父がソフトバンクの犬だということを言い出せずにいた。参観日に後ろを振り向くとフィリピン人の母が立っていた。よしおに気づくと笑顔で手を振った。

「よしお起きる」と朝母が言って布団をまくった。今日は参観日だから綺麗なかっこうをしていた。「よしお起きる」母が言った。

　授業では天体観測の話を女教師がしていた。隣の子が小声で話しかけてきた。よしおくんのお母さん美人ねと言った。美人の部類であるのは事実だと思った。目がぱちっとしていて睫が長かった。

　僕は女教師の質問に答えられなかった。後ろを振り向けば母が悲しそうにしているかもしれない。隣の子が着席してから褒美を与えるみたいに答えを教えてくれた。感謝してほしそうにしていたけれど、不満だった。彼女も同じく不満そうだった。「消しゴムのときもそうだったよね」と言った。私が消しゴムを落としてしまった。それでよしおくんが拾おうとしたけど、たかしくんが先に拾ったよね。よしおくんはたかしくんの手に触わっちゃった。

モリーモリー講演

司会：さっそくですが先月行われた大会についてご意見を伺いたいと思います。

森：先月の三回戦のことですね。賛否両論ありますが、私は比較的好意的な見方ですよ。

司会：森さんですから（笑）

（場内笑い）

森：皆さん驚かされたのは事実だと思います。それが大事です。もちろんすぐにこれは眉唾ものだぞ、油断ならないぞと思うわけですが、私はそういう緊張感のある場面に立ち合うことができた、それが嬉しかったのです。

司会：皆さんすでにご存知のこととおもいますが、先月行われたモリーモリー国際大会の三回戦でブロック選手が出した技がいま物議を醸しております。

森：いや物議というほど大げさな話ではないでしょうけどね。知らない人のために説明しておくと、彼は右手を高くあげて土足で太鼓判を踏んだのです。右手と太鼓判これ自体何も問題ではなかった。しかし彼はそこに詩をつけてしまった。

司会：「幸運なる人々よ…」

森：言葉がいけないというわけではない。もともと私たちは言葉を重く見ている。だからこそあの行為も看過するわけにはいかなかった。

司会：モリーモリー自体が言葉で構成されているわけですからね。

森：そう、私たちは言葉にかわるものとしてモリーモリーを演じているわけではない。モリーモリーが言葉そのものである、そうした理念に立っている。そこに彼は詩を導入してしまった。これは冒涜ではないか、こういうわけです。

day dream

真夜中に明日飲みに行かないかとメール。翌朝あいまいな返事をすると来てくれると嬉しいと言われ嬉しくなってつい行くと言ってしまう。

店に行くと彼女一人でもう一人はまだのんきに家で娘を風呂に入れているらしい。一時間くらいしてようやくへらへらと現れる。

「ぶうたろうは呼ばなかったの」と彼が言うと彼女が呼んでみますかといって電話をする。来るのか来ないのかはっきりしないまま話は終わって、

間もなく彼の電話が鳴って電話口でぶうたろうが「色仕掛けやめてくださいよ」とか言ってるのを彼が繰り返してるらしい。

ぶうたろうが彼女のことを好きでまったく脈がなかったことをみんな知っているからちょっと残酷なことをしているのはわかっているけど面白いからいつも呼びだすのだけど、

数分後に現れたぶうたろうは明らかに不機嫌で、みんな元気無いくらいにしか思っていなかったみたいだけど不機嫌なのは明らかだったけど冗談を言ってみんなへらへら

しているとぶうたろうは何も注文しないままそろそろ帰りますといってすぐにいなくなってしまった。

ぶうたろうがいなくなってからも閉店までへらへらと話が続いた。暖かい日だったけど店から出てみると夜はやっぱり寒い。

コンビニで帰りの車を待っているあいだ、二人で雑誌を見ていた。彼は家が近いからコンビニでトイレを済ますと歩いて帰って行った。

彼女は「アンパンマンを探せ」という本でアンパンマンの仲間探しをしていた。車はすぐに着いていっしょに帰る。

別れ際に「また誘いますね」と言われ「はいはい」と答えてしまう。はいが一回多かった。コンディションあまりよくないのか酔いのまわりが少しおかしい。

よしおの中学生日記

朝目覚めたときにフィリピーナの母のうちのひとりにキスをしてもらいたくて寝たふりをしていると母は「よしお、おかしいね、どうした」と言った。

よしおはおかしいどうしたかと思って目をぱっちり開けるとまた母は「よしお、おかしいね、どうした」と言った。

よしおは「大丈夫、大丈夫」と言ったが母は首を振ってしゃがみ込んでよしおの手を取ろうとしたのかよしおの布団の中に手を突っ込んで手がありそうなところを

探しまわって、布団の中からよしおの手を引っぱりだした。「大丈夫か、よしお」と言った。「だいじょうぶだ」とよしおは言った。

「大丈夫だ、よかった」と母は言ってよしおの手を布団の中にしまった。「よしお、起きる、朝だよ」と母は言った。「ご飯はできている」

階段を下りるとリビングではもう例のマネキンが服を着て席についていた。「おねえちゃんはもう食べちゃったよ」と母が言った。

マネキンの前のご飯はすっかり平らげられていたし、マネキンの口のまわりもすっかり汚れていた。よしおはマネキンの前に座って朝食を食べた。

母の料理はまずくないけれど変わった味がする。人のうちの味がする。

リビングのテレビに父が出ると母はほら、お父さん出てるよと言った。「今日も頑張ってるよ」

父はソフトバンクの犬だからなかなか家に帰ってこない。シーエムで演じている家族がよしおはたまに羨ましく思う。

よしおがちらちらテレビを見ながらご飯を食べていると突然目の前のマネキンがけたたましく振るえ出し、机ががたがたと揺れる。

母がマネキンの頭のてっぺんのボタンを押して、「ほら、よしお、遅刻するよ、お姉ちゃん怒ってる」と言って洗い物の作業に戻る。

よしおは急いで残りの朝食を口の中に詰め込んでランドセル背負って家を飛び出すのだった。

ウマノイド

風が強くてベランダで洗濯物が飛ばされそうになっている。あまり広いベランダではないから洗濯物は窓にぶつかってかちかち鳴る。

ウマが「日増しに泥棒扱いされるの誰かわかってきたか。ちっとも呼吸整わないじゃないか」といい、私の手を握っていた。表情はいつになく穏やかな様子だった。

機嫌を損ねないように私もつい笑顔になる。

叫びながら歌う街の日射し

光といえば何か物知り顔でああと遠い目をするのが近頃の知識人とやらの嗜みであるらしいが、ここのところバーデップハップスが熱中していることについて

何事か気のきいた冗談でも言い合おうという気になれるものはいかななんでもかんでも節操無く首を突っ込みたがる彼らといえどひとりもいなかったようだ。

バーデップハップスは夢を見ていた。犬の毛についた蚤は放っておけば数日と待たず何十何百と増え家じゅうの絨毯の上を飛び回るようになる。

　困惑したのは増えてしまった当の本人たちであった。私たちの居場所はいつのまにかこんなにも狭苦しくて息苦しい場所になってしまった。

主人の犬は素知らぬ顔で窓の外を眺めている。光が語りかけているのだった。彼は彼の使命を感じ取ってしまった。

「背筋をのばし、どこか誇らしげであるのはいつものことだろう」

　バーデップハップスにピヨーデルトシューゲルトマハが彼の頭をふざけて顎でつつきながら言った。バーデップハップスの耳に彼の言葉は届かなかった。

彼が今日ちょうど千回目の跳躍をしたとき彼の主人は誇らかな目を一瞬彼のほうに投げかけたとみえた。彼は主人を見下ろしていた。

それなのになぜだろうか、このときほど彼が自分自身を卑小な存在に感じたことはこれまでにないことだった。

バーデップハップスがそのときの主人の敬虔なまなざしを忘れることは生涯けっしてないだろう。

　ピヨーデルトシューゲルトマハにしてみたらこれほどおそろしいことはなかった。

友のこんなにも取り乱した姿、それはあまりに淫らだった、「こんな姿きみはだれかにみられでもしたらどうする」ピヨーデルトシューゲルトマハは気が気ではなく

無理やりもう一度飛ぶつもりでいるらしい彼の脚をつかんで他のものたちの目の届かないところまで荒々しく抵抗する友を必死で抑えて、今にも漏れそうな嗚咽をこらえ、

ピヨーデルトシューゲルトマハはいかにも善良な市民らしく、彼の堕落した姿が些細な口論の末の粗相程度のものにどうにか似るようにと腐心するのだった。

「なぜとめるんだ」バーデップハップスはもう一度主人にお目見えするところを止めるのにはわけがあるんだとしっていて、それだけに余計に腹がたった。

ピヨーデルトシューゲルトマハ、彼はいつもそうだ。なぜ私の邪魔ばかりする。ああ、知っているさ、もちろん君は僕のためだといいたげにいつも涙をこらえるんだ、

そういうのが好きなんだ。貪るのもいい加減にしてくれよ、ピヨーデルトシューゲルトマハ。

　鉄の窓枠を露が濡らしていた。日もだいぶ高くなったらしい。子供たちが雪解けの公園で遊んでいる声が聞こえる。暖炉の残り火もやがて消えるだろう。

玄関の鉄柵を開けて、新雪の雪道に足跡を残す人の影が近づいていたのだ。そのときだった、蚤が高らかにこの日最後の跳躍を果たしていた。

果てしない

　これまできいてきたことを全部ひっくるめてあなたがようするに何が言いたいのかということを自分なりに考えてみればあれとかそれとか名指せる程度のものを抱えて、

ポケットに手を突っ込んで、天を仰ぎみれば何かと目を細めがちだった頃を思い出して雲の隙間からこぼれる光がかすんで、

知らないことから目をそむけて悦に浸っている子供たちのことを忘れようとしていた日々がまた蘇るのかやめてくれそうはさせるか、

きっと頭のひとつでも下げれば楽になれるのかもしれないものを、下げるにしてもいかにしてということを考えながら歩いてみれば少しは気も晴れるかなと思うことが

しょっちゅうあるよ、酒を飲み交わしながら隣の人がそう言ったとしても私は何も答えずにいようとしたはずだ、その人にただ淡々と話してもらうために。

　手をつなぎ合って、橋を渡る男女と橋の端の手摺のあいだのわずかな隙間をうしろの人の目を気にしながら、一応私は努力はしているというアピールをしつつ

通れるか通れまいかと躊躇いがちな歩調でよちよちと歩いているところをちゃんと見ていてくれるかどうか不安になりながらも彼はうまくやっていたと思う。人間やればできるものだ。彼の肩をたたき私はねぎらいの言葉をかけた。彼は照れくさそうに私の腹をおもいっきり強く叩いて、僕にだって人のまねごとぐらいできると言った。

　小屋に帰るといつものようにジャバグロニエーリョが床に新聞紙を敷いてこちらに背を向け寝ていた。

「おかえり」ジャバグロニエーリョが言った。「今日はどうだった」

「どうってことないさ。しかし、ソレノンバキャピヨンチインのやつはやりやがったよ、たいしたもんだ」

「やめてくれよ」ソレノンバキャピヨンチインのうれしそうな声にジャバグロニエーリョの耳が少し動いて、

振り返りそうな気配になったが少し肩をそらしただけでまたそれほどの興味もなさそうに背を丸めた。

よみがえるとき

　いつでも両手をあげたりさげたりしていればいいと思っていた。すぐに駅の近くの自動販売機でまたあのいまいましいドリンクとやらを買いたくなることなんて

目に見えていたのに、そんなのおかまいなしにその頃の私はキュウリだとかバナナ！と叫んで友達と肩を組んでわざと体重を重く乗せあっては転げまわっていたのだ。

エリックが言った。

「・・・」

　なんと言ったっけ。私たちはいつもの腹の出たおじさんが鍬を持って現れると畑のくさむらに身をひそめてちょっとだけ目をのぞかせてそれが通り過ぎるのを

わくわくしながら見届けていた。行ってしまった、今日もまた。エリックは僕の背中に手を回していた。僕もエリックの腰に手を回していた。

そうしていないとバランスが保てないから。エリックが立とうと言うまで僕はいつまでも立たなかった。しかしエリックはその日なにも言わなかった。

エリックをみると眼をつむっていた。僕は目蓋の上から彼の目をおさえつけようとした。そのとき「おまえも閉じてみろよ」と彼が言った。

しかしここで白状しなければならないことがあるのだが、僕にはエリックの言葉がそのころまったくわかっていなかった。生まれた国が違った。

エリックは僕の知らない言葉できっと彼はそう言っていたと信じたことに従って笑ったり怒ったり泣いたり叫んだりふざけたりしていたのだ。

私はエリックがそう言ったと思った。「おまえもその眼を閉じてみろよ。何か見えるだろ」

　エリックはさらに言った。「それが彼が残していったものだよ。ごらん、三つの斑点があるだろ。それは彼の白いランニングについたシミだよ。

いつも背中の肩甲骨のあいだのあたりについていただろ。あれがそれだよ」

　それが星のようにまたたいているのだ。

ウマノイド

　ひとりのウメが私の腕を引っ張って横断歩道の前で左右をきょろきょろ見ながら歩いているところをみると、どうやら私はまたここへきてしまったらしいということに

小躍りして車に飛び乗ってから今のいままでまったく気づかずにいたということに今さらながら驚き、あきれないわけにはいかなかった。

ウメは言った、またすぐに電子レンジの上にあるおもちゃ箱のようにおじいちゃんの言葉に耳を傾けるようになると。ウメの言葉は私には理解できない。

どうも彼女が言っているのは私が解釈して文字の上に残していることとはまったく別のことであるらしい。というのは、彼女の言葉は他のウメやウマにはすんなり

受け入れられているようだからだ。

　たとえば、彼女が「私の上にあったものが崩れてきたときに並んでいたものはなんであってもよろしくやっているわ」と言っておかしそうに微笑むと、

他のウマやウメもさもおかしそうに相槌を打つのだった。「君だってそうだろう、この前電信柱から遊離した子バトたちにはさんざんキャラメルの色を

押し付けられたはずなのに、次の日にはけろっとしていた」ウマは言った。

　ウメが私の手の中で人差指をてのひらにめり込ませたときが私が例の言葉を行使しなければならないタイミングであった。

「おはよう」私は唇の端を上げて、わかるかわからない程度に目の前のウメとウマにおじぎをした。すると彼女たちは私の言葉に満足したみたいに笑顔をつくって

よく意味のわからない言葉を私の隣にいるウメにかけるのだ。

「そう、ウメのウマはいつも洗濯バサミが湧出することだけでも偉いのに、まして近視眼的な想像をはたらかせる天才がワンとほえるとはな」

「もちろん、ウメだってわかってる。どんなに光彩が広くても二重に映る言霊はないって」

　目の前のウメとウマは私と隣のウメから目を離そうとしなかった。ようやく彼女たちのスカートのひだが鳴ると、会話は中断になってウメたちは手を軽くあげたり

会釈をしたりして別れる段となった。私はそのときになってようやく手をにぎるウメから解放される。

ウメは私をその狭苦しい建物の三階のウメとウマがすし詰めになった小さな部屋のなかに押し込むともと来たみちへと帰っていく。

ウメはいつも私の手を離してからスカートのひだから電話を取り出して画面を見つめては溜息をつくことを習慣としているようで、今日も彼女はそれをしていた。

何かの暗号かもわからないから私はウメがポケットからそれを取り出して、溜息をつくタイミングを見誤らないように彼女の後ろ姿が見えなくなるまで

目を離さないようにしている。

　たくさんのウメやウマたちを観察するためにはいちばんうしろの席が最適なのかもしれないということはわかっている。

前に行けばいくほどウメとウマの脅威にさらされやすいだろうこともわかっている。しかしそれ以上に私にはこの小屋でやらなければならないことがあった。

やがて大きなウマかウメが小屋に入ってきて部屋のいちばん前の一段高くなったところで謎の言葉を語り出す。

するとそれまで狂乱気味に飛び交っていたウメとウマの奇声がいっせいにやみ、彼女か彼らか、わからないがそのウメとウマたちはなにやら机につっぷして

大きなウマやウメの言葉に共鳴りを起こしたかのように手が震えだすのだ。その現象をはじめてみたときの驚きと恐怖がいかばかりであったか。

私の手をにぎるウメの一人は小屋で私が何をしなければならないかということを私に教え込ませた。ウメは「小屋は小屋でも将来的にキンモクセイの鼻がいやになるほど

かがなければウマさまそこまできたかなんて言っていられなくなる。どうしてもいやなら金魚のフンが腐るのをみなさい。あれだってまんざらでもないのだから」

　私はウメの言葉をきいて、きこえていてもきこえていなくても変わらない人の顔でそれに対処した。

それをみてウメは溜息をついて「ウマだからウメとウマがウメでウマ」と言い前傾姿勢をとってから右側の手を震わせて「ウマ？」と私の顔を険しい表情で覗きこんだ。

私はとりあえず「ウマ」と答えたのだった。正直言ってそのとき私は彼女に求められていることが理解できなかったのだが、

この小屋にきたときにその謎はすべてとけてしまった。しかし同時に別の謎と脅威がいやましに増していった。

　大きなウマの放っていたような言葉をかきとめたノートをみせるとウメは満足したようだった。「私からウメをとったら世の中うまらないのだからね。

もっとウマさまがはたらける知識と経験がこやしを食べなければ」

次などない

　今日かぎりでの、何もない、繰り返しが弾んだりたわんだり軋んだりしていたのに比べたらいくらかましになったかもしれないなんて悠長なこと言っている人の群れに

行きあい、それとなく交わした言葉がそれとなく反響し合いながらも奪われていくのに耐えられなければ私のもとへ来なさいと悪魔が囁いた日に聴いた鐘の音が

しみわたっていったあの空に近いと思った。ウメはゆっくり近づいてきた。去年見たウメと似たような顔とちょっと違った雰囲気の衣をまとったウメにおずおずと

視線を合わすべきか否か迷っているうちにすぎ去ればよいと思った瞬間に私の上目づかいに彼女の視線が思わず触れてしまって、申し訳ないような心地で

覚えたての挨拶とおぼしき言葉を彼女に返したそのときのみじめな思いを隠さんばかりの笑みが口元にすれ違ったあとしばらくの間こぼれて止まないのに戸惑いながら、

金属の乗り物がある場所へ。

　私は絶えずウメから電波を受信しなければならないことになっていたが、受信機を小屋に忘れてきてしまったようで、今日は一日何も受け取らずに済んだ。

小屋にもどってみたらいずれにしても電波は受信されていなかったことがわかったのだが。

　横断歩道の前に立つ人たちの集まりが私の金属の塊が滑らかに横切るのをぼんやり目で追っているのを眺めながら何も考えないでいたのに、

私はなぜそんなウメやウマたちのことに触れようとしたのか、感傷的になりたい気持ちがウメたちの目に溢れていると感じたわけでもないだろうに

夕日なんて思い浮かべてしまったのは、その先の海岸が一足先にか、あるいは私のほうが一歩遅れて気づいてしまったからか、

定かではないこと、つくりものめしいことどもばかりが脳裏によぎるのにはいい加減うんざりしているはずではなかったのか、なんて言い聞かせてみたことなどさえも

私には一度だってないというのに。

　電信柱というものが写真に写っただけで大騒ぎしている人たちの話を盗み聞きしていても、

確かにさもありなんと頷けば頷いてみるほどにかけ離れたものになっていくひとの態度におののかずにはおれないということを私は以前にも書いた気がするのだが、

どうだったか。それにつけても、人が一歩歩けば世界が崩れてしまうとひゃあひゃあ言うのはいかがなものだろうか。

ウメに言ったら、おまえがそうなってしまったのは私のせいだ申し訳ない、という気持ちを押し殺すためにとでもいったわずかな間をおいてから、

そうした感情を私はあなたのために必死に押し殺そうとしているのだということをいかにもけどってほしそうにいかめしい顔つきであべこべのことを

どうやらウメはそのとき口にしたらしい。

　小屋の電気をつけるといつものように木箱が足元に照らされる。身を屈めて、ざらついた表面をひと撫でして何事もなかったかどうか確認するが、

それが毎日やっていることだったのかどうか思い出せずにあせる気持ちがつのった。これ以上なにか確認しようなどという気を起こすべきではないのかもしれない。

何も確認などできない、確認されるとしてもそんなのは私の気づかれたくないことばかりに決まっているのだから。

動因は

耳から鼻に抜けて、臍を通って足先から大地に伝えるその運動を繰り返すのです。私たちがではありませんよ。常に背中に意識を集めなければ。

意識といっても私たちの意識ではありませんよ。だからといって誰の意識でもないというわけでもありませんよ。それは私の意識では確かにありますが、

同時に私の意識ではありません。あなたの意識であるかもしれませんが、もう言うまでもないですね。あなたと私が通じているわけではありません。

世界と私とも違う、あなたと世界とも違いますよ。いっしょくたにしないでください。私たちは別々であって別々でないなどとも言ってはいけませんよ。

そういう話が好きな人たちの集まりがいくらでもありますから、そんなこと言っても何もあなたが特別でいられるわけではないのは周知のことです。

特別であるために私の言うことに従おうとしているならなおさらあなたにとって私の流儀は必要ありません。

ここは我が家ではないのですから、まず玄関の前に立って下さい。

私たちが出迎えるまであなたは靴箱の上の花瓶とか壁にかかっている花の油絵の印刷物でも眺めていればよいです。何分か待って誰も来ないようであれば、

咳払いをしてみたり靴の音を出してみたりすればよいですが、あまり行儀のよいことではありません。そんなことしたらなおのこと私たちは奥から出て来られなくなるかも

しれませんよ。私たちはあなたが玄関に立っていることをもうずいぶんと前から知っているかもしれないじゃないですか。

でもあなたが咳払いをして私たちのうちのひとりが恐る恐る出てきたとしますよ。

玄関の前で手を後ろに回してあなたはつま先立ちで玄関に続く廊下の奥でひょっこり顔を覗かせている私たちのうちのひとりの姿を捕らえようとする。

おっかなびっくりで私たちのうちのひとりがあなたの前にその全貌を明らかにしようとしている。

玄関のすぐ横には扉があって、それは磨り硝子になっているから実はそこにもうひとりいて、あなたの様子を一目見ようと気づかれないようにゆっくり扉をスライドさせて

いる。もちろん硝子は透けますからあなたにはその一部始終が見えている。目を合わせてはまずいとあなたはそこで思わなければならない。

もうひとりはゆっくりと恥じらいながら廊下を前進してくる。上目遣いで。でもやっぱりやめようかと思う。あなたは怖いかもしれない。

テレパスひろみ

「汝はテレパスひろみじゃ」

「なんですって！」

「汝はテレパスひろみじゃ」

「なんですって！」

「汝はテレパスひろみじゃ」

「なんですって！あなたは誰なの！」

「汝はテレパスひろみじゃ。汝はテレパスひろみじゃからテレパスひろみとしての使命を全うしてまらわねばならん」

「私はいまここにいるのにどうしてあなたはここにいないの！」

「使命は全うされねばならんかった、正確に言うと。借金取りというわけじゃ」

「鏡の前に立ってるわ！」

「知っている。しかしどうしてわしの言うことがわかった」

「テレパスひろみだからよ！」

「汝はわしに負債がある。鏡の前に立て」

「立ってるわ！」

「汝はテレパスひろみじゃ」

「知ってるわ！」

「なんで知っている」

「テレパスひろみだからよ！鏡の前に立ってるわ」

「なんでわしの言うことがわかった」

「テレパスひろみだからよ！鏡の前に立ってるわ」

「テレパスひろみよ。汝に使命を与える」

「知ってるわ！」

「知っているなら言ってみよ。汝がテレパスひろみであるとするならば」

「知ってるわ！私は使命を与えられたわ」

「さすがじゃ。汝は確かにテレパスひろみじゃ」

「鏡の中の汝はわしを見ておる」

「確かにそれなら鏡の中の私はあなたを見てるに違いないわね！」

「鏡の中のわしは汝を見ておる」

「確かにそれなら鏡の中のあなたに私は見られている違いないということね！」

「ここまで来ては言い逃れもできまい。汝はわしの顔に泥をぬったのじゃぞ」

「冗談じゃないわ！それは私がしたというの！」

「苦しい言い逃れじゃ。聞きたくもない」

「私はあなたのことを知ってるわ」

「ついに認めたな。墓穴を掘るとはこのことじゃ」

「謝る暇があればとっくに使命は全うされていたかもしれないわね」

「忙しいのはわしもいっしょじゃ。450日しか休みがない」

「ふん！450日だなんて聞いてあきれるわ！」

「わしの仕事を増やさんでもらいたい」

「消えなさい！消えなさい！」

「手を叩いたって無駄じゃ」